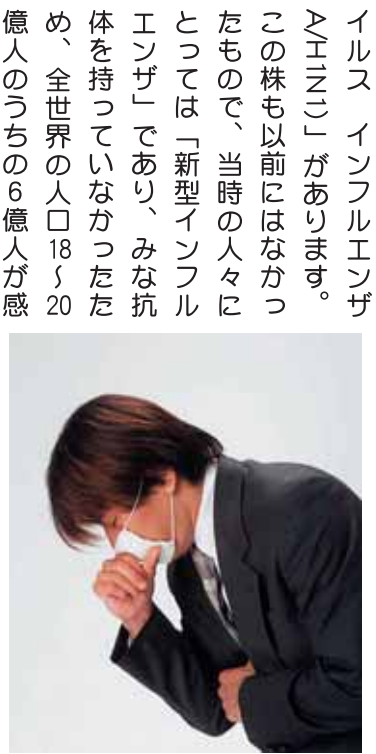


# インフルエンザの流行とワクチン接種

医療法人啓仁会 所沢ロイヤル病院 院長補佐 医師 深山 牧子

2009年に発生した「当時の」新型インフルエンザの記憶はまだ新しいことと思います。新型インフルエンザとは、これまでヒトの世界で流行したことのないインフルエンザウイルスが、トリやブタからヒトへ感染して、ヒトからヒトへ感染することができるようになったものをいいます。新型インフルエンザウイルスはヒトが初めて出会うウイルスですから、多くの人が免疫を持っていないため、感染が拡大しやすく、私たちの健康や社会生活に大きな影響を与えかねません。この時も世界中で大きな流行となり、多数の患者の発生と死亡例が報告されました。



過去のインフルエンザの大流行(パンデミック)のひとつに、1918年に始まり数年続いた「スペイン風邪(原因ウイルス インフルエンザA/エニシ)」があります。この株も以前にはなかったもので、当時の人々にとっては「新型インフルエンザ」であり、みな抗体を持っていなかったため、全世界の人口18億人のうち6億人が感染し、5000万人が死亡しました。日本でも5500万人の人口のうち48万人が死亡したとも言われています。戦争や災害などを含めても、もっとも短期間に多くのヒトの生命を奪った悲劇となりました。

2009年に発生した新型ウイルスは、当初病原性が不明であり、外国で多数の死者を出していることから、空港での水際作戦や病院での発熱外来など、いろいろと大騒ぎをしました。いったんウイルスが日本に入り込むと、人々が免疫を持っていないため、9月というインフルエンザにとっては季節外れにもかかわらず、大規模な流行が起きました。新型インフルエンザが入ってきた時は、この株だけの流行が広がり、他の亜型のウイルスの流行がみられないのが特徴で

す。幸い、日本での死亡者は非常に少なく、迅速診断キットと治療薬が有用であったためと考えられています。翌年には多くの方が免疫を獲得され、2010年の冬には通常の季節性インフルエンザに混じって新型インフルエンザの感染も見られた、という程度でした。したがってもうすでに「新型インフルエンザ」とは言えず、季節性のインフルエンザの仲間入りをして、名前も「インフルエンザA(エニシ)2009」と呼ばれるようになりました。

インフルエンザに対する予防や治療などの基本的な対策は、季節性インフルエンザであっても新型インフルエンザであっても変わりません。基礎疾患のある方、妊婦の方、乳幼児や高齢の方などが重症化しやすいことが指摘されています。全ての方にインフルエンザの予防のために手洗い、咳エチケットなど基本的な感染防止対策とワクチン接種を勧めます。ワクチンは、65歳未満の健康成人で、70%以上の発症予防効果があるとの報告があります。また厚生科学研究費による「インフルエンザワクチンの効果に関する研究」の報告によると、65歳以上の健康な高齢者については約45%の発病を阻止し、約80%の死亡を阻止する効果があったとしています。インフルエンザは流行性疾患であり、いったん流行が始まると、短期間に多くの人へ感染が広がります。日本では、季節性インフルエンザが例年12月〜3月頃に流行します。抗体ができるまで2週間〜1か月かかるので、おそくとも12月初めまでにワクチン接種はすませましょう。これまでの研究から、ワクチンの予防効果が期待できるのは、接種した(小児の場合は2回接種した)2週間から5カ月程度と考えられています。そのため、毎年のワクチン接種が薦められるのです。

8月26日夕方6時、釣り始めて約1時間。浮きは左から右、すなはち、伊万里湾(海)から川に向かってゆくりと動いている。予測通り上げ潮で川の水が逆流する理想的な流れだが、私の浮きには全く当たりが無い。横では私の師匠である、おん年90才になる叔父がかなり真剣に竿を振っている。と云いますのは、叔父は一投目からちょっと小型だが32〜33cmの子又(黒ダイ)を釣り上げて興奮気味なのです。

この日は、折からの台風14号の影響で、急な雨が降ったり、止んだり、空には不気味な雷雲を気にしながらの釣行でした。沖磯と違って側に車を止めていつでも逃げられる状況での釣りなので気分的には楽でした。

午後6時を過ぎたのでもうそろそろ帰ろうかオジちゃん。」と声をかけたその時、私の浮きにわずかな当たりがあり、浮きが20cm位スーッと沈んで数秒止まりました。しかし浮きはまだ見えています。何が食っている、くわえているだけか?小さな餌取りか?だけどこで合わせては絶対ダメ、自分に言い聞かせながらじつと待ちました。すると案の定浮きはゆくりと元の水面に浮き上がって来ました。でも二度喰いがあるかも知れない。我慢比べです。すると2〜3秒後再び浮きがスーッと20cm位沈みました。二度喰いだ!!と思つた瞬間浮きは勢い良く水中に消し込まれて行きました。「来た!!」私はハリスが切れない程度に大きく含ませました。十分な大物の手ごたえです。約10分間のやり取りの末、写真の如き立派な子又を釣り上げ、叔父と二人意気揚々と家路につきました。



筆者 叔父(90歳) 現役皮膚科医

1時間後にはお腹の中!!

<http://ameblo.jp/madameiri/archive1-201208.html> にて他の写真もご覧になれます。

## 100歳の釣師の想い

医療法人昭仁会 北野病院  
名誉院長 西久保 国昭

は脊椎のOPPEをしてリハビリ中でした。少しでも外へ連れ出そうと叔父の病院の裏を流れている伊万里川の土手を散歩していました。途中に橋がある景観の素晴らしい所です。橋の中程から何か魚はいないのか?と、何げなく見ているとビツクリしました。私にははつきり黒ダイ(子又)と分かるいずれも40cmオーバーの魚が約10匹位ゆうゆうと泳いでいるではないですか。このことを人に話しても誰も信じてくれませんでした。道具さえあれば...。その時は決心しました。来年は用意できると釣り上げて見せる!!と。そこで今年には必要最小限の道具を頑丈な竿ケースに入れて送っておいたのです。

私は本懐をとげた満足感でいっぱいでした。叔父も極細のハリスで強い引きの子又を釣り上げた感触が忘れられないでしょう。何度も何度も話をしました。この時だけは二人共医師と云うより漁師になっていた様です。この夏の叔父と共に過ごした素晴らしい時間は何物にも変え難い生涯の思い出になる幸せなひと時でした。